

京都画壇と鉄齋

—富岡鉄齋旧蔵資料を中心に—

「万卷の書を読み、万里の路みちを行く」ことを実践して得た該博な知識により、画壇において独自の地位を確立した富岡鉄齋とみおか てっさい（1836～1924）。生涯、儒者を自任し、画家とみなされることを嫌いました。ほとんど独学で画を習得したとされる鉄齋ですが、そのはじまりにおいては、南北合派くぼたせつようの窪田雪鷹くぼたせつように手ほどきを受け、南画家の小田海僊おだかいせん、大和絵の浮田一蕙うきたいつけいのもとにも往来しました。また、御所再建事業などに参加した京都の有力絵師の一人である中島華陽なかじまかようの娘達なつ（明治2年没）が初婚相手であったことは、特筆すべき事柄でしょう。

維新後は画壇と一定の距離を置きながらも、流派を問わず幅広い世代の画家たちと親交を結び、自身が生まれ育った京都の発展のために心を砕きました。京都美術協会、日本南画協会の設立に加わり、京都青年絵画研究会、京都市美術学校（現・京都市立芸術大学）では、歴史、古典、故実、修身を講じて後進の指導にもあたっています。

本共催展では、富岡鉄齋旧蔵の小田海僊、浮田一蕙こうの、幸野さいの楳嶺ばいれい、今尾景年いまおけいねんらの作品・資料を紹介し、京都画壇と鉄齋の関わり的一端をひもときます。

小田海僊の遺稿を購う

— 京都画壇の血脈 —

小田海僊（1785～1862）は四条派の呉春に学び、のちに南面に転じて一家を成した江戸時代後期の画家です。嘉永3年（1850）、海僊は京都の聖護院村に移居し、画室を営みます。当時、聖護院村には富岡家の別宅があり、近隣には歌人・陶芸家として名高い大田垣蓮月尼、書家の賞名海屋、画家の中島華陽らが住まいしていました。鉄斎が父の命により、蓮月の学僕として同居していたことは知られていますが、同じ頃、海僊宅にも出入りしていたようです。青年期の鉄斎作品には、海僊の画からの影響が指摘されています。

明治32年（1899）、64歳となった鉄斎は、海僊の少壮より中年に至る写生帖及び粉本類数百点を購入します。覚書によると、海僊の孫が遊蕩費のために手放したものを、まとめて手に入れたといいます。海僊没後30年の歳月を経て出遭った遺稿に、鉄斎は大きな刺激を受けます。強い意欲をもって中国画学習に励み、独自の画風を確立した海僊の姿勢が知られるもので、《姑蘇十景図》《瀟湘八景図》など、鉄斎は気に入った遺稿を画帖や卷子に改装し、題字や覚書を書き入れ、あるいは自身の画と合装して愛蔵しました。

後進を導く

— 儒学者としての鉄斎 —

儒者を自任した鉄斎は、画壇との交わりにおいては学者として臨み、画家たちも鉄斎を同業者ではなく、学識者として敬意を払いました。鉄斎は明治27年（1894）から10年間にわたって京都市美術学校（現京都市立芸術大学）の囑託教授として教壇に立ちますが、担当したのは修身でした。「時々歴史人物や甲冑衣冠、その他総ての考証などに就て生徒に教授しているが、どうも生徒の学力が其処に至らんから、此方のいうことが腹に入りかねる。元来画家というものは、昔から不学無術の者が多いからどうも困る。」と苦言を呈しつつも、「画を以て法を説く」、「画は勸戒に資す」ことを信条とした鉄斎にとって、人を導き教えることは喜びであったと推察されます。また幸野樸嶺がシカゴ万国博覧会（1893年）に出品するにあたって作品の画題選択の相談にのり、富田溪仙が第5回内国勸業博覧会（1903年）に出品するために構想を練っていた「神功皇后釣鮎図」の時代考証について教授したといいます。明治生まれの作家たちが、鉄斎の画に近代性を見出し評価するのは、鉄斎を一躍全国区に押し上げた、明治42年の高島屋美術部展覧会開催以降のことです。

幸野椋嶺『晴蝸廬印譜』

— 日本画家に自刻印を贈る —

近代京都画壇の父と称される^{こうのばいらい}幸野椋嶺(1844~95)が、明治28年、数え52歳で死去します。三回忌にあわせて、印譜集^{せいこく}『晴蝸廬印譜』(明治30年2月序、「晴蝸廬」は椋嶺の号の一つ)が編まれました。題字を篆刻家^{かとうしざん}の加藤紫山、序文を富岡鉄斎が寄せ、ついで鶯夢こと椋嶺が「世は絵画の時を得たる様なれど」と題して詠んだ「春風に筆の海ばら波あれてひらふかひなき絵の島の道」の和歌が収録されています。

本印譜には椋嶺所有の126顆の印影がありますが、このうち朱文楕円印「豊」(椋嶺の名「直豊」)は、鉄斎が刻したものです。鉄斎の手控えに、吉野山の古桜を材に用いて自ら刻して椋嶺に贈ったことが録されています。椋嶺が返礼に描いた^{かざんかしんそうじょう}「華山可進騷擾之図」(^{うへきがだん}《迂癖画談》)のうち、清荒神清澄寺^{いんべき}(鉄斎美術館蔵)には、落款印にこの印が捺されています。「印癖」を誇り、篆刻を能くした鉄斎は、椋嶺はじめ、望月玉泉、橋本雅邦、今尾景年^{いまおけいねん}(『養素斎印譜』収録)ら日本画家にも自刻印を贈って、文雅の交わりを結びました。これを受容した画家たちが、趣致に富んだ鉄斎の印をいかに活用したかは興味のあるところですよ。

竹内栖鳳の欧州視察を見送る

— 鉄斎が見た近代京都画壇 —

1900年のパリ万国博覧会^{たけうちせいほう}で、竹内栖鳳(1864~1942)の「雪中燥雀」が銅牌を受賞します。万博ならびに欧州視察のため、栖鳳と工学博士^{なかにわいわた}中澤岩太らが京都を出立したのは明治33年8月1日のことで、七条停車場には京都市長^{ないきじん}の内貴甚三郎、市会議長の雨森菊太郎、官員、画学生らが見送りに来ていました。鉄斎も激励に赴きますが、栖鳳の師^{こうのばい}の故野椋嶺^{れい}と確執^{すずきしょうねん}のあった鈴木松年とその門下は来ていなかったといひます。「又南画派の画士も来る者なし、南北此の如く相容れずや、何と其の心の頑固なるか」と鉄斎は当時の京都画壇の様相を嘆き、自身については「和光同塵を常とす」(富岡鉄斎筆録「所見漫筆」)としています。

栖鳳は7カ月かけて欧州各地を巡りますが、滞在先のロンドンから鉄斎に絵葉書を送っています。近況を伝え、土産話をたのしみにと記していることから、両者の関係が窺えます。栖鳳は帰国後、西洋の「西」にちなんで号を「棲鳳」から「栖鳳」に改めたとされますが、11月1日付の鉄斎宛絵葉書の署名に「栖鳳」とあるので、欧州滞在中に使いはじめていたことがわかります。

《在京諸子送別会書画》

—東京画壇との交わり—

明治36年(1903)10月2日、鉄斎は京都を出発し、関東方面に向かいます。信州浪合村なみあいにおける伊良親王ゆきよし殉難記念碑建碑式に出席して副祭主を勤め、信州・関東地方を巡遊後、しばらく東京に滞在しました。この間、三田長松寺おきゆうその荻生徂徠らいの墓を詣でて詩を奠し、また本郷文求堂ぶんきゆうどうにて店主田中慶太郎が北京より携え帰った嘉靖板『王維全集』8冊を観て、その高額さに驚いたといえます。時の大蔵大臣曾禰荒助そねあらすけ、子爵の諏訪忠元、石川成秀を訪問し、画家・貴族院議員の下条桂谷けいこく宅では、所蔵の書画を観るなどして過ごしました。

鉄斎が帰洛するにあたって、11月25日、麹町区の星ヶ岡茶寮で送別の小宴が開かれました。曾禰荒助の題字が備わる《在京諸子送別会書画》は、鉄斎のために集った東京画壇の日本画家ほか書画や旧作の詩文を席上揮毫して、記念に贈った巻子です。筆者には、京都から東京へ移った川端玉章かわはたぎよしょう、野村文学のむらぶんがくをはじめ、大槻如電おおつきじよでん、益頭峻南ますずしゆんなん、荒木寛友あらかんゆう、下条桂谷げじょう、佐久間鉄園さくまてつえん、高島北海たかしまほっかい、今泉雄作いまいずみゆうさく、金子溪水かねこけいすいの名があります。鉄斎への敬意が感じられる顔ぶれであり、当時の画家・文人ネットワークが知られる貴重な資料です。

皇后御前揮毫

—栄光の晩年—

大正6年(1917)11月15日、京都市公会堂において皇后御前揮毫が執り行われました。同年6月12日、鉄斎は帝室技芸員を拝命します。これまでも御前揮毫を行ってきた鉄斎ですが、拝命後はじめて、貞明皇后の御前で揮毫を披露することは、光栄の至りであったと思われます。写真におさまるのは、前列左から伊藤小坡いとうしょうは、上村松園うえむらしやうえん、富岡鉄斎とみおかてつさい、今尾景年いまおかげい、後列左から都路華香つじかこう、山元春举やまもとしゆんきこ、菊池芳文きくちほうぶん、竹内栖鳳たけうちせいほうです。当時の京都画壇の大家が揃うこの一枚は、「御前揮毫の画家」と題されて新聞にも報じられました。鉄斎はその新聞記事を小坡に貰ったと、筆録「愛古漫筆」に録しています。



鉄斎の死を悼む

—近代京都画壇の画家たち—

大正13年(1924)12月31日、富岡鉄斎は89年の天寿を全うします。同年9月の山田介堂^{やまだ かいどう}、10月の今尾景年^{いまお けいねん}に続く「巨星墜つ」の報に、京都画壇は大きな衝撃をうけます。鉄斎死去をうけて、『アトリエ』『美術画報』『尚美』『中央公論』などの美術雑誌が特集号を刊行し、その死を悼みました。

このうち『大毎美術』第29号「富岡鉄斎翁特輯」は、京都画壇の画家たちの追悼文を掲載するものです。巻頭に、竹内栖鳳^{うちせいほう}と共に画壇の重鎮として活躍した山元春挙^{やまもと しゅんきょ}が「鉄斎翁の人格と芸術」の一文を寄せ、師森寛斎^{もりかんさい}と鉄斎の篤い交情、脱俗高邁な人柄を讃えています。また幸野棧嶺^{こうの ばいれい}の門人である川北霞峰^{かわきた かほう}、加藤英舟^{かとうえいしゅう}は、師棧嶺と鉄斎の親密な間柄をいい、明治20年代に鉄斎が「棧嶺塾の若い人々のために歴史を説いたり、古典、故実を解説されたりした」と述べています。

彼らに共通する鉄斎評は、後進に親切であったということですが、「鉄斎翁と棧嶺翁」には、棧嶺死去にともなって、鉄斎が好意で墓碑銘を撰文するも、竹内栖鳳^{さくち ほうぶん}、菊池芳文^{つじかこう}、都路華香^{つじかこう}ら門下との見解の相違から、不用となったエピソードが紹介されています。

(柏木知子)